

## ライフコースと生涯スポーツに関する一考察

—高齢者のスポーツ愛好家を対象とした事例研究—

柴田 丈 (埼玉県立岩槻商業高等学校)

## A Study of Life Course and Lifelong Sports

—A Case Study: Sports Participants of the Elderly—

Takeshi SHIBATA(Iwatsuki Commercial High School)

### Abstract

The purpose of this study was to recognize the reality of lifelong sports more profoundly. The way of study was individual hearing research of people 60 years of age and over in Saitama Prefecture who were active sports participants.

The result of this research was that their sports activities in their late teens were deeply related with their lives of today, in addition, their continuous sports activities were supported by meeting teachers and friends or by the cooperation of their families. In other words, sports participants of the elderly had many experiences using their bodies, and implicitly knew that environment involving themselves was important.

Moreover, the following results were obtained, to perform sports continually, it was important to take the connection of ordinary life with sports activity positively. And continuing the sense of value was very important for lifelong sports.

Key Word:lifelong sports, experiences, the elderly, life course.

### 抄 録

本研究の目的は、「生涯スポーツ」の現実をより深く認識することである。研究方法は、埼玉県内に住む60歳以上のスポーツ愛好家を対象にした、個別の聞き取り調査である。

調査の結果、10代後半のスポーツ活動が現在の生活に深く関わっていた。またスポーツ活動の継続は、教師や友人との出会い、さらには家族の協力によって支えられていることがわかった。換言すれば、スポーツ愛好家は、身体を介して多くの「経験」をしているとともに、自己を取り巻く環境が重要であることを暗黙のうちに知っている。

スポーツを継続的に実践していくためには、日常生活とスポーツ活動の関わりをポジティブに捉えることが大切であり、尚かつその価値観を継続させることが「生涯スポーツ」にとって大きな意味があると考えられる。

キーワード：生涯スポーツ、経験、高齢者、ライフコース

# 1. 問題の所在

「生涯スポーツ」という言葉をよく見聞きするようになったが、中でも社会の流れに敏感な学校教育においてよく用いられ、体育の授業では指導要領を基に、将来を見据えた授業展開が試みられている。しかしその現実、指導要領の表層を捉えた実践が多く、「生涯スポーツ」の持つ意味についての理解や解釈は非常に曖昧と言わざるを得ない。

この原因の一端は、学校現場をも含めた一般社会での理解の多くが、あたかも「生涯スポーツ」を共通認識しているという錯覚を基底にして、継続的なスポーツ活動の現実を自明の枠でくくってしまうところにあるのではないだろうか。言い換えれば、「生涯スポーツ」を実体（すでにそこにあるもの）として捉えてしまうこと自体に問題があると思われる。

学校現場に身を置く筆者が「生涯スポーツ」を問うためには、これまでに筆者が恩恵を受けてきた体育の授業やスポーツ活動といった、経験的知識に基づいた展望（パースペクティブ）に依拠する以外に方法はないが、さらなる広い視野で「生涯スポーツ」についてのパースペクティブを求めるためには、単なる経験的な思い込みや数値化されたデータのみに依存してきた認識を解体し、再構築しなければならない。

そのためにはまず、実際にスポーツ活動を行っている人々が何を考え、如何なる状況で活動を行っているのかに対し、筆者自身がより深い認識力を持たなければならない。そこで本研究の目的は、「生涯スポーツ」に関する様々な事象の中から、特にスポーツ愛好家のライフコースに接近することにより、「生涯スポーツ」の現実が如何に構成されているのかを、より深く認識することとした。

# 2. 研究の方法

## (1) 研究の方向性について

「生涯スポーツ」という言葉が如何なる行為の集合として用いられているのかについて問い直すためには、まず「生ける行為」そのものの現実を捉えることから始めたいと考えた。そのためには、継続的にスポーツ活動を行っている実践者自身のライフコースを調査し、その中で自明のこととして見な

されてきたことや、無意識のうちにやり過ごしている事柄を如何に読み込むかという作業が重要となる。

したがってその作業を行うにあたっては、あくまでも個人にこだわり、フィールドワークを通して基礎資料を得ることとした。

## (2) 調査方法とその対象者

- ・調査方法：現在までのスポーツ経験を中心に、これまでの生活を、各々の話しやすい方法・手順で語ってもらう個別の聞き取り調査。後日その内容を筆者がまとめ、郵送。対象者が紙面にて確認・訂正を行う。
- ・調査場所：対象者の自宅、大会会場、練習場、喫茶店。
- ・調査期間：平成6年9月25日～平成7年8月6日。
- ・対象者：埼玉県に在住している60歳以上<sup>1)</sup>（62～67歳）のスポーツ愛好家（陸上競技3名、テニス2名）。

# 3. 結果と考察

## (1) 調査対象者のライフコース

○A氏について（図1）

（調査場所：自宅 月日：9/25、10/20、1/14、4/29）

旧制中学時代、草野球ではあったが準硬式野球の投手として活躍し、高校入学後も野球部で活躍したいと思っていた。しかし野球道具一式を揃える経済的余裕がなく、結果的に陸上部に入部した。入部の根拠としては、入学した高校が「全員運動部活制」であったこ

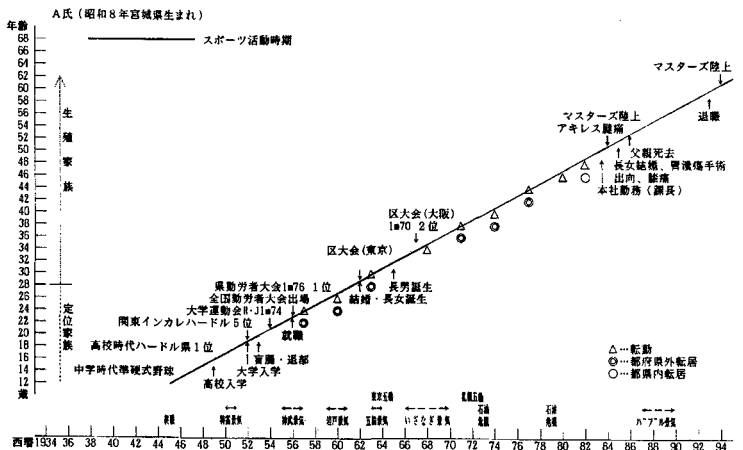


図1 A氏出来事連関図

と、以前より「駆け足が速かった」こと、道具を揃えることが他の運動部より「安上がり」であったことがあげられる。入部後は、先輩から薦められたハードル競技に取り組み、自他共に練習の虫と認めていた。親に買ってもらったスパイクシューズのためにも頑張ろうと思ひ、さらに部内の良きライバルにも恵まれ、3年生のときには、県大会の110mJrハードルで優勝している。また当時地元出身の高跳び選手(当時早大生であった鈴木義博氏)の正面跳びのフォームを写真で見て、自分も同じような跳躍がしたいと思ひ、自分なりにまねてみた。

大学入学とともに上京し、陸上部に入部。2年生のときには関東インターカレッジで活躍したが、その大会の直前に行った盲腸炎の手術が、結果的にその後の体調に影響し、退部をした。復調後は学部対抗の運動会に走り高跳びで参加したが、そのときの1m74という記録は、当時のインターカレッジの入賞記録(同じ年の関東学生陸上1部校では、1m70で5位入賞)と比較しても遜色がない。

就職後は地元(宮城県仙台市)に戻り、県の勤労者大会の走り高跳びで優勝し、全国大会にも参加した。しかし翌年には転勤で再び上京した。その後13回の転勤を繰り返すこととなるが、その間結婚や子供の誕生などをはさみ、それぞれの地区で地元の陸上競技大会に参加している。

仕事量も影響し、33歳を境にしてスポーツ活動から遠ざかるが、もともとスポーツに対する興味関心や欲求が高く、49歳のときマスターズ陸上のことを新聞紙上で知るとともに登録を行い、大会参加をしている。

しかしこのとき、走り幅跳びの1回目でアキレス腱を痛めた。

その後は、再び仕事に忙殺されたり、内臓疾患で手術を行うというアクシデントにも見舞われ、再度スポーツ活動から遠ざかるが、その間もスペクテーターとして様々なスポーツに触れていた。

退職を機に再びマスターズ陸上に参加するようになり、膝痛などの症状を抱えながらも、自己の体調に合わせたスポーツ活動を継続している。

○B氏について(図2)

(調査場所:自宅 月日:10/8、11/10、1/21)

高等小学校卒業後一旦機械工として就職したが、母校の校長先生の薦めで教員養成所に入り、准訓導の資格を取得して地元の小学校の教員となった。小学校の教員時代には、村の青年団陸上大会の走り高跳びで優勝し、郡の大会でも優勝している。

20歳のときに師範学校へ編入し、中学の体育と職業(技術)の免許を取得して地元の中学校へ赴任した。その後10年の間に、走り幅跳びや走り高跳び、短距離走などで3度県の教職員陸上大会に出場している。またその間、授業では地域性を生かしたスキーを行うなど積極的な取り組みをしているとともに、陸上部やスキー部の顧問として生徒を全国大会に導いている。しかしB氏にとって運動部の顧問としての意識は、スポーツ活動をしているというよりも、教員の仕事のひとつと捉えられる。その後、地区の中体連事務局を引き受けたり、地域住民を対象にした歩く会などで実際に野山を歩いているものの、この活動についても自己のスポーツ活動としてよりも、指導的立場という意識に基づいた活動と言える。

定年を待たずに退職し山形県を離れ、以前より義父母が移り住んでいた埼玉県に転居した。

現在ではマスターズ陸上をはじめ、万歩会、歩くスキーといったスポーツ活動に参加している。しかしマスターズ陸上の登録に際しては、情報提供を含め、行政機関の対応の悪さにかなり苦勞させられた。<sup>2)</sup> それでも今日スポーツ活動を継続して行っている背景には、B氏自身が教員時代に獲得した様々なスポーツ経験と、その経験の結果とし

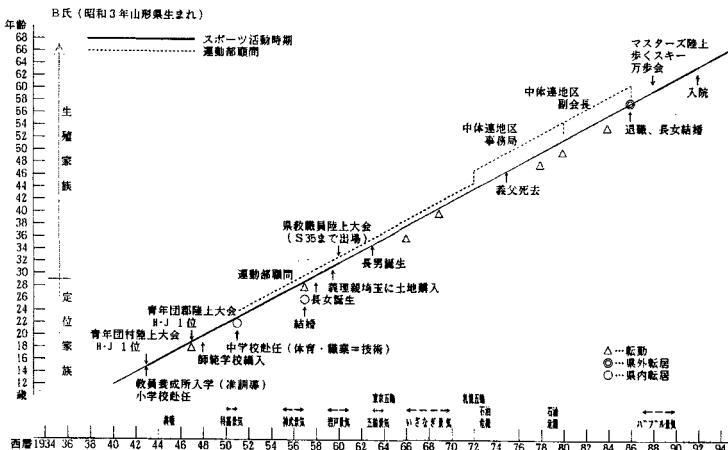


図2 B氏出来事連関図

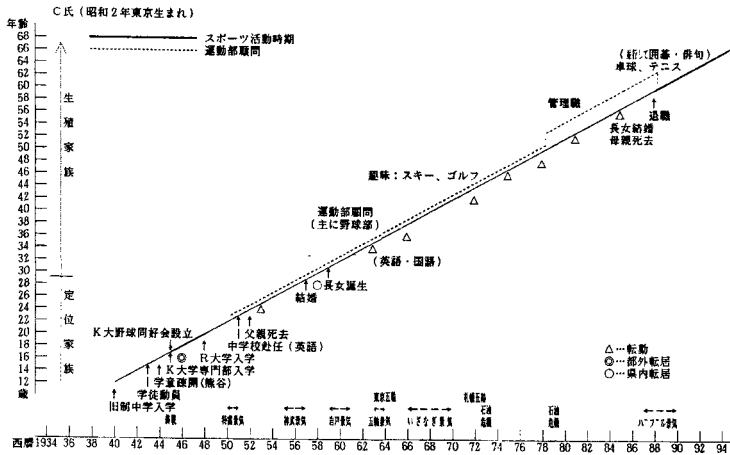


図3 C氏出来事連関図

て得られた身体活動に対するB氏自身の価値観に依るところが大きいと考えられる。

○C氏について (図3)

(調査場所: 自宅 月日: 2/1)

後楽園球場の近くで生まれ育ったため、小さい頃からプロ野球を観戦する機会に恵まれ、その影響もあり小学生のときすでに野球用のスパイクを買ってもらっていた。戦時中は何度か自宅を焼失し、学徒動員(朝霞飛行場整備等)や学童疎開(埼玉県熊谷市)も経験している。

戦後すぐに大学に入学し、そこでは仲間とともに野球同好会をつくった。さらに英語教師として埼玉県内の中学校に赴任後も野球部顧問として積極的に野球と関わっていった。体を動かすことが好きだったため、管理職になるまで、常に運動部の顧問を引き受けていた。また個人的には、ゴルフやスキーなどの趣味を楽しんでいた。

退職後もスポーツを愛好する気持ちに変わりはないが、少年野球の指導などに関わる気はないという。C氏にとっての野球は「勝負」そのものであり、「健康」のために体を動かそうと思っている現在の生活には当てはまる余地はない。すなわち、同じスポーツであっても、これまでに経験してきた野球と、現在行っている週1~2回のテニスとは、「勝負」と「健康」という対極的な意識に依っている。もちろん、現在のC氏の日常生活にとって、野球を

通じて獲得された身体経験の意味は大きいと感じる。しかし今日のC氏は、自己の身体を直接的に捉える環境<sup>3)</sup>が整っており、このことが日常生活とスポーツ活動の媒介的意識として「健康」を意味づけていると考えられる。

○D氏について (図4)

(調査場所: 練習場所、大会会場 月日: 6/11、7/9、8/6)

学生時代、特にスポーツが得意というわけではなかったが、病気による高校退学をきっかけに健康に対する強い意識が生まれ、それに伴って身体への

こだわりが出てきた。地元(秋田県)の木工訓練場で技術を習得することと並行し、ジョギングを行ったり陸上競技の練習などを行うようになったが、その過程には、共に活動した友人の存在があることを見逃さない。その後上京して就職をしたため、競技会に参加するなどの本格的な活動は行われなかったが、健康という視座から身体を見据える気持ちに変化はなく、現在までジョギングを継続するとともに、日常の生活も規則的に行う等の注意を払っている。

現在のスポーツ活動への直接的なきっかけは、45歳のとき偶然に参加した町内の運動会である。しかしD氏の活動についての基本的な要因は、高校退学後の一連の活動にまでさかのぼって捉える必要を感じる。

その後50歳のときに新聞記事で知ったマスターズ陸上への登録を行い、現在でも年に2~3回のペースで大会に参加するとともに、休日には市の陸上競技場に

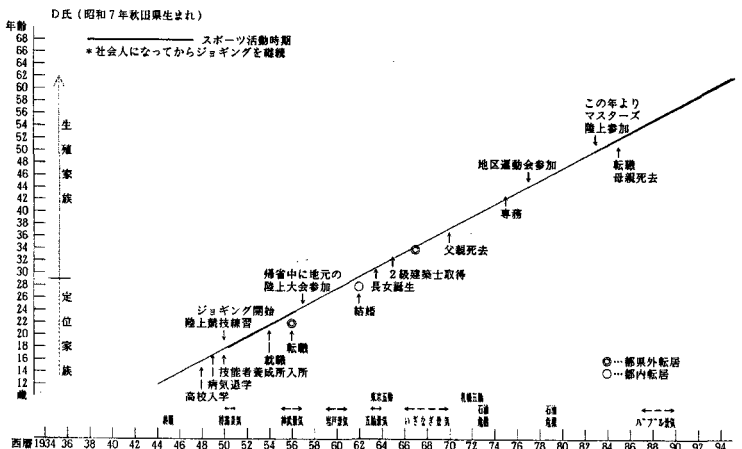


図4 D氏出来事連関図

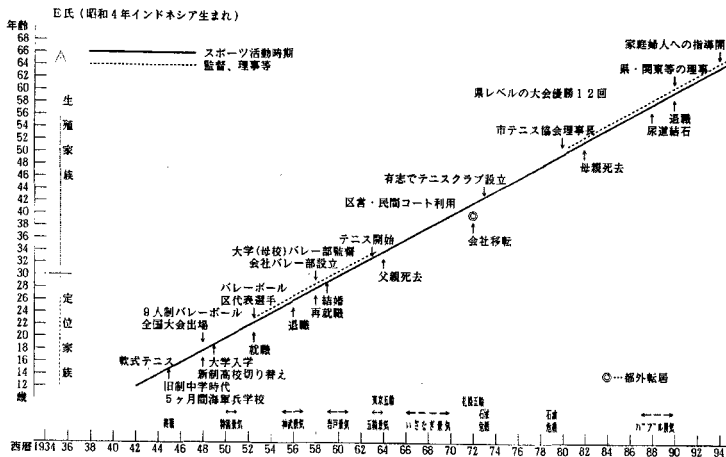


図5 E氏出来事連関図

出向いて練習を続けている。

活動の基底には今でも健康に対する強い意識が見られるが、今後の目標についてのD氏の気持ちは、健康を見据えながらも、暗黙の内にさらに高いレベルを志向している。

○E氏について (図5)

(調査場所：大会会場、喫茶店 月日：6/11、7/13)  
父親の仕事の都合上インドネシアで生まれ、小学校4年生のときに一家で東京に転居した。

高校のときには、バレーボールで全国大会に出場、大学でもバレーボール部で活動した。就職後も社内にバレー部をつくったり、母校の大学のバレー部の監督を10年務めるなど非常に活動的であったが、一連のきっかけは、旧制中学のときの一人の先生との出会である。このときE氏は、多くの人たちと場を共有しながら活動を行う中にスポーツの楽しさがあることを学んでおり、このスポーツ観が現在でも様々な年齢層の仲間たちとテニスを楽しんでいるE氏に深く関わっている。さらに、現在テニス協会において要職を引き受けているE氏の存在を直接的に位置づけることとなった転機は、バレーボールからテニスへの切り替えのタイミングが大きい、それ以上に、仲間とともにスポーツを高いレベルで楽しもうとするE氏自身のスポーツに対する価値観と、その価値観に対する周囲の理解や協力が大きな要因として働いていると考えられる。

E氏のスポーツ活動は、それぞれのライフステージにおいて常に中心的な位置づけをなしているが、中でもテニスクラブを創設し運営していく過程 (例えば、テニスコートになりそうな空き地を借り受け、仲間と

協力しながらコートづくりをしていくときのイニシアチブ) のE氏からは、積極性と創造性が読み取れる。

退職後は、より多くの時間をテニス関連の活動に費やしている。しかしこのようなスポーツ活動への関わり方は安易に獲得されたものではなく、その基底には他者と共有する楽しさについて、学生時代から無意識のうちに身体に擦り込まれてきたE氏のスポーツ観を否定することはできない。

(2) ライフステージとスポーツ活動

ライフステージ毎のスポーツ活動を

見ると (表1)、全員が10代から何らかのスポーツ活動を行っていた。今日ほど趣味に対する選択の幅がなかったことも関係しようが、それ以上にスポーツを楽しむとする自己の意識やその意識づけを助長する周囲の環境が大きな影響力を持っていたと考えられる。すなわち、自己にとってポジティブに作用する他者 (例えば教師や友人) の出現がその後の生活において、結果的に転機の役割を果たしていたという事実が認められ、逆に疾病等により身体的条件が整わなかったり、転勤等により社会的条件が満たされなかった場合などでは、スポーツ活動の中断が見られた。

調査の結果から、スポーツを通して体现されている「生き生きとした現在」は、次の要因によって基礎づけられていると考えた。

- ・スポーツ活動それ自体が目的意識となっている。
- ・スポーツ活動のきっかけとなる時期に、影響力を及

表1 ライフステージとスポーツ活動

区分	A氏	B氏	C氏	D氏	E氏
学生	(~22才) 野球→陸上 スパイク・正面 面跳びの写真 →体調不良	(~15才) 河原の砂地遊 び→高跳びご こ	(~23才) 後東園球場・ スパイク→同 好会	(~16才) 雨天体操場・ 卓球 病気で高校退 学	(~23才) 教師の影響→ バレーボール
定住家族	(22~28) 全国勤労者大 会 転勤	(15~29) 校長助言→准 訓練→青年団 陸上大会→中 学体育免許取 得・運動部副 顧問	(23~29) 中学英語教諭・ 野球部顧問・ 県大会入賞	(16~29) 健康意識・ジ ョギング・陸上 競技→再就職 就職→再就職 バレー部創設	(23~30) 就職→大学研 究室→再就職 バレー部創設
社会人	(28~60) 転勤 地域陸上大会 →ブランドン マスターズ登 録・出場・付 が→病氣入院	(29~58) 運動部顧問・ スキー→全国 大会引率→中 体連地区事務 局・副会長	(29~60) 運動部顧問→ 管理職	(29~) 健康意識・転 居地区→運動 会参加→マス ターズ登録・参 加 転勤・東京 →テニス協会 理事等	(30~60) バレー→テニ ス・会社→転 居・大会出 場・テニスク ラブ創設→市 テニス協会理 事長等
生離家族	(60~) マスターズ→ 腰痛・会社休 業 →テニス	(58~) 海外転居→マ スターズ登録 ・出場・万歩会 →テニス・困 窮 病氣入院 マスターズ出 場	(60~) 健康意識 →テニス・困 窮・俳句	(60~) 健康意識・参 加 →テニス	(60~) 関東テニス協 会理事 家庭婚人指導 体調不良
退職後					

ぼす他者の存在がある。

- ・現在のスポーツ活動は、それぞれの経験的知識に基づいて行われている。
- ・現在のスポーツ活動は、日常に包摂されなかつ、日常を否定しない非日常的時空間<sup>9)</sup>において存在している。

### (3) 「いま」「ここ」におけるスポーツ活動とそのコンテキスト

生涯スポーツを個人という視座で捉えた場合、そこにはそれぞれのコンテキストが横たわっており、それぞれの「いま」「ここ」と無条件に繋がっている「あ のとき」「そこ」を捨象することはできない。

メルロー＝ポンティ<sup>9)</sup>も言うように、「私という主体は、過去と未来という二重の地平を有しているからこそ……客観的な時間のなかで一つの固定した自己」として認識できるわけである。さらにそこでの私という主体は、まさにシュッツ<sup>9)</sup>が言うところの身体と見なされる。

例えば陸上競技やテニスを単純に勝敗という視座から捉えると、勝敗を決する場は閉じられた空間として「この」世界（“the” world）となる。しかしスポーツ愛好家にとっての「この」世界は、さらにシュッツが示すように、「私の生活史の状況の関連のある諸要素に即して、『わたしの』世界へと移し換えられるようになる」<sup>10)</sup>可能性が高いと思われる。すなわち、外から眺めている他者の目に映るプレーヤーとしての身体からは、個々のコンテキストが捨象され、まさしく行為者としてのみその場に存在する。しかし行為者である私の意識は、当然自己の生活史の上に成り立っており、フィールドやコートにおける行為自体、「私の世界」における純粋な身体活動として意識づけられていると考えられる。

このような認識把握の根拠は、対象が高齢のスポーツ愛好家であることとも関係しているが、それを強く印象付ける要因として、個々の「経験」が深く関係していることに注目したい。もちろん各々が獲得する経験は千差万別であり、その経験的差異という事実によって個が強く表出されてくると考えられる。

しかし表面的には差異を生み出す「経験」も、その基底には、ある共通性が読み取れる。例えばアルノルト・ゲーレンは経験について、「実習であり、取捨選択

であり創造と構成であるが、それによっていつでも正しい判断がくだせるわけではない。すなわち『経験のある』人とは、何かが出来る人<sup>9)</sup>を指すと言っている。言い換えれば、「経験」の持つ共通性とは、科学的実証に基づいた客観的な正しさと捉えるよりも、各々の生活世界において身に擦り込まれた、その人にとっての「確かさ」と捉えられよう。

もちろん、どのようなことをどの程度経験したのかによって、「いま」「ここ」における選択肢の数や質は異なってくる。しかし如何に経験を積んだとしても、我々が日常生活において下す様々な判断の根拠となる「確かさ」は、常に曖昧な感覚から切り離されることなく、また如何に科学が発達した今日でも、その出発点は自己の視界を介した世界経験<sup>9)</sup>以外にはあり得ない。

スポーツを愛好している高齢者は、自己の身体を取り巻く様々な条件が整うことで、スポーツ活動の場としての非日常的な空間との関わりを持てるようになるが、同時に、その自己を規定しているものが科学的である以上に経験的であることを知っている。さらにその多くは、「日常知」<sup>10)</sup>として身体に擦り込まれてきたものである。このことはブルデュエ<sup>11)</sup>がスポーツ実践の弾力性について述べている点を具体的に示したものと云えよう。

愛好者は、大会等において競技を行う空間を共有するとき、他者を排除するのではなく、常に共在者との深い仲間意識を優先させている。これは、愛好者にとってのスポーツ活動の場が、日常と完全に切り離された勝負という志向性に強く固執した空間とは異なり、個々の生活世界を切り捨てることなく形成される、付与的な場を裏づけているからである。

生涯スポーツの本質的価値は、日常という自明性の枠に包摂されているため、一見捉えにくい非日常的時空間における「生き生きとした」身体活動を通してなされる、日常生活への有意味な働きかけにあると考えられる。

換言すれば、スポーツ愛好家にとって、スポーツ活動という行為そのものが、その都度の日常世界の「いま」「ここ」を再構築する大きな要因として働いているのではないだろうか。

#### 4. まとめ

紙面の都合上、時代背景という面からの考察は行わなかったが、それでも今回の調査に応じてくださった方々は、ある意味での人生の成功者と言えよう。しかしその成功は安易に得られたわけではない。

スポーツ活動継続の根拠を愛好者の視点に立って捉えると、①スポーツに対して純粋な愛着を感じ、②自己を取り巻く環境への積極的な働きかけを行い、③自己のペースを維持する努力を積み重ねてきた結果、と言える。すなわちそれぞれの対象者が、現在までの過程で、その都度知識の集積に依拠しつつ行った選択を、刹那的に終結させなかったという事実が、スポーツ活動を継続させている要因として、今日の個々の日常性を方向づけているのではないだろうか。

#### 注記及び引用・参考文献

- 1) 年齢設定の理由は、①年齢コーホートを揃えることと、②一般的な退職年齢として節目の年と考えたこと、に基づいている。
- 2) 行政に対する不信感や不満はB氏とC氏から得られた。B氏の場合は、転居してきた当時、マスターズ陸上の登録方法について、埼玉県Y市の市役所を訪れて問い合わせたが、いくつかの課を回されたあげく結局何の情報提供も受けられなかった。しかたなく出身地の友人を經由してようやく埼玉のマスターズ事務局を知り、登録したが、登録が実現したのは市役所を訪れてから2年後であった。その後のB氏の情報源はもっぱら新聞である。またC氏は、荒川河川敷の公園にある県営のテニスコートとそのコートのネットを貸し出す管理事務所が3 km以上も離れている事実を指摘し、現実にそぐわない行政の対応を批判している。
- 3) 部活動の指導においては、生徒の身体をまず捉え、その身体を介して自己を見つめていたと考えられるが、現在では、他者の身体を介さず直接的に自己の身体を捉えることができる。
- 4) 具体的には、日常世界を最も身近で共有する家族の理解が大きな意味を持つ。例えば、「妻が大会会場に同行し、競技中の写真を撮ってくれた」(A氏)とか、「子どもと一緒に地区の運動会に参加した」(D氏)という事柄がスポーツ愛好家の日常と非日常をポジティブに関わらせる要因となっている。

5) M・メルロー＝ポンティ (竹内芳郎、小木貞孝訳)  
: 知覚の現象学 I 129 頁 みすず書房 1967年

6) 「利用可能な知識の集積は、常識の世界の諸類型化からでき上がっている。個人は、この知識の集積を図るため、幼いときから膨大な数の『経験の受領証』を集め続けており、そのことがその後、彼の経験の諸相を理解あるいは少なくとも統御する手法として役立つ。』アルフレッド・シュッツ (M・ナタソン編、渡部光、他訳) : 社会的現実の問題 [I] 24頁 マルジュ社 1983年

このことは正に、我々一人ひとりが主体身体として、個々のコンテクストに依拠していることを示している。

7) アルフレッド・シュッツ前掲書、23頁

8) アルノルト・ゲーレン (亀井裕、他訳) : 人間学の探究 108 ~109 頁 紀國屋書店 1970年

9) M・メルロー＝ポンティ前掲書、3頁

10) エスノメソドロジストは、人々が知っていると思いついで使用している事柄を「日常知」(common-sense knowledge)として概念化し、それ自体分析の必要があるとしている。K・ライター (高山真知子訳) : エスノメソドロジーとは何か 2頁 新曜社 1987年

11) ブルデューはスポーツ実践について、「その技術的な『内在的』定義そのものにおいても、常に大きな弾力性を示し、したがって、全く異なった使用に対しても大きな可能性を提供する」と述べている。ピエール・ブルデュー (石崎晴巳訳) : 構造と実践 283 頁 新評論 1988年